

特殊教育における心理劇的方法 - 保育者資質養成の実例 -

北原歌子

日本心理劇協会

I. 目標

本研究は、集団保育に、行為法、心理劇法の新しい技術を取り入れて実践した研究の一つである。昨年のも23回大会において発表したのにつき、心理劇の有効性が、集団保育指導において実証されることを目指している。また、方法としては臨床行為法を用いて、児童の自発性、創造性、自立性を高め、集団保育によって、幼児期の人格形成と社会への適応性を深めることに本研究の目的がある。さらにこの研究において、保育者の資質養成に心理劇の、とくに監督養成の技法(形象描出の能力=集団状況演出力の養成)が役立つことも明らかにしたい。

II. 方法

心理劇では、われわれの生活を発展させるために必要な人間関係の科学的認識の基礎を三者関係の原理の把握においている。私は、集団保育に必要な指導法として行為法を用い、言語的理解の方法によつての治療ではなく、実際に演じ、行為するという体験に、重要な意味をもたせる方法をとっている。それは具体的な活動における体験的事実に重きを置いてすすめられる方法である。

III. 指導の形態

集団指導の現場では、保育者であるセラピストは、その場の状況によって、心理劇的技法のどれを適用するかを決定し、必要に応じて技法を新しく発見して活用する。保育者の資質養成に心理劇が有効と思われる莫はとくにこの莫である。状況における関係の発展が与えられるように、心理劇の技法を活用して指導者は、その発展の方向を

洞察し、関係の発展に必要な関係のしかたを成立させなければならない。ある状況からある状況への推移を予測的に、「目に見る」ことが技法の発見には必要となる。ここに述べる実例は、私の体験から精神障害児の集団指導において、心理劇の技法、三者面談法、ダブルリングの技法(二重自発法)を併用し、集団行動のとりにくい、人と人とのコミュニケーションのつけにくい子どもたちの遊びの指導を行なうことにより、その遊びから、ことばの出やすい状況へ、ことばの出る状況へ一人との関係が成立する状況への推移にねらいをおいて、効果をおげたものである。対象は、幼児3~6才男女の精神障害児で、6人/グループ、集団保育指導のリーダーチームは、保育実習生4名を合わせた5名、週一回、二時間行なう。

・二重三者面談法による言語治療

使用したこの方法のとくに新しいところは、三者の状況で治療の効果のあがる三者面談法を活用し、一人では、友だちとのおそびに入ることでできない子どもにも、リーダーチームが補助となり、その補助媒介に、もう一組のリーダーチームとの三者面談法によるチームを成立させ、子どもとのチームの二重関係(接在領域)の形成による治療を進めるところである。治療の効果は、その子どもたちにも、セラピストにも、補助自発のリーダーチームにも、変化がもたらされ、人間関係の発展が促進されることにおいてとらえられる。

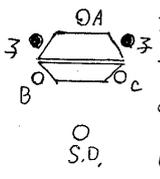
この治療をすすめるにあたっては、セラピストが、三者面談法の原理と、関係状況療法・三者関係論の認識を深めることが、大切である。それに基づき、このウォーミング・アップをすすめる状況設定の意味、ウォーミング・アップの目的方向性の明確化、関係的に動く状況の変化の中での

セラピストの発見、かかわり方の技術変化などを把握することが治療の効果をあげるのに役立つ。

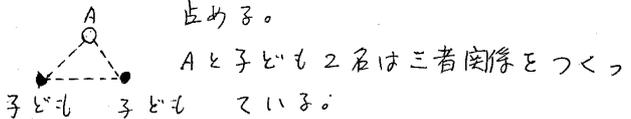
A. 方法

- ① 課題の明確化 - 親との話し合い
- ② 準備 - 室内、安定した明るい部屋、テーブル、椅子六つ、積み木(小型、フレーベル)
- ③ リーダーチームの役割 - 総監督 - 名あそびリーダー - A・B・C 三名のリーダーチームの編成。主リーダー - A およびサブ・リーダー - B・C の三名は、お互いに自己の役割を明確にし、その役割の機能的分化をはかりながら、子どもとの関係では、統合された活動をすすめる。主リーダーは、関係的に存在する子どもとの活動の中で、主体的な活動の指導的役割をとる。サブ・リーダーは、主リーダーの補助的役割となり、直接的には状況全体への働きかけはしないが補助的役割としていることにより、子どもと主リーダー、子どもどうし間の通路がつかせやすいように、子どもに即して働き、サブ・リーダーのいることにより主リーダーと子どもとの関係が発展し、状況が展開されやすいようにふるまう。

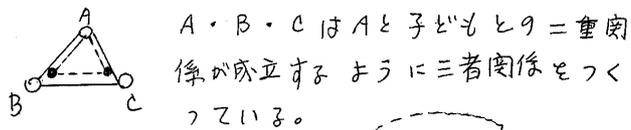
④ 状況設定 - 三角形のテーブル、ニフを合わせ



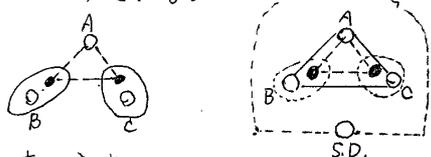
六角形にし、中央に主リーダー - A、左右に子ども 2 名がすわり、子どもの横にそれぞれサブ・リーダー - B・C がすわる。総監督 S.D. は状況全体をとらえてふるまえるように位置を占める。



A と子ども 2 名は三者関係をつくっている。



A・B・C は A と子どもとの二重関係が成立するよう三者関係をつくっている。



⑤ 導入法 - ウォーミング・アップとして、子どもが状況に適応しやすくなるよう、子どもが積み木あそびを自由にできるように、セラピ

ストはそのことが子どもにわかり、安定した状況展開がすすむように子どもたちの活動を見守り時に子どもの一人あそびを話しかけ、また受け容れる。

- ⑥ 関係的發展の状況 - サブ・リーダーは、セラピストの補助的役割となり、子どもどうしの間が、つながるよう、それぞれ子どもに即して、補助的に働きかける。同時に、セラピストは、一人あそびから 並行あそびへ、並行あそびから、共有あそびへと誘導する。
- ⑦ 役割交代 - リーダーチーム、A・B・C は、役割交代をして、主リーダーの役割を交代とりながら、状況変化をもたらす。
- ⑧ 働きかけの変化の方法 - 最初は、子どもがお互いに、遊びに興味を持つように働きかける一友だちと一緒に自分も動きたくなるように働きかける一友だちといっしょに自分も動く。その中で、ことばが出てくるように働きかける。場面轉換をして、より子どもの創造的、自発的活動を高める一子どもとセラピストと補助的役割の二重三者関係の中で、遊びがアクションへの移行、全員参加のサイコドラマ的場面が展開するようふるまう。

B * 臨床実例 (昭和46年1月16日・治療場面記録) IV・結果の考察は、研究発表会場で述べる。